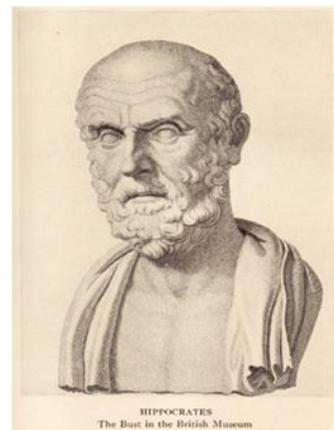


口腔の役割

口内炎あれこれ

突然、痛みで気が付く口内炎。その多くはアフタまたはアフタ性口内炎といわれるものです。このアフタという言葉は初めて用いたのは医学の祖、ヒポクラテスです。ギリシャ語のもとの形は「αφθα」と、難しく発音できませんが「火をつける」の言葉からきています。舌や唇、頬（ほほ）の粘膜などの口腔粘膜に発生する直径1～10mmの円形または楕円形の痛みを伴う潰瘍で、周囲は幅の狭い紅暈（こううん）と呼ばれる赤いふちどりがあります。ヒポクラテスはこの痛みと見かけから火傷（やけど）を連想したのでしょうか。食べる楽しみを奪うこの口内炎は、症状を正確に表す言葉「アフタ」として現在まで引き継がれてきたに違いありません。



ヒポクラテス(BC460-375)



アフタ性口内炎

アフタの原因は、咬傷や歯ブラシ、義歯による傷がきっかけになる他、ウイルス感染、ストレス、疲労、アレルギー、白血球減少症などありますが、そのほとんどは原因不明で、一般的な治療はウイルス感染を除き、副腎皮質ステロイド軟膏やアズレンの含嗽薬（がんそうやく）などの使用ですが、通常は4～5日ほどで自然に治ってしまいます。

アフタの中にはしばしば再発を繰り返すものがあり、これが「再発性アフタ」です。1個～複数のアフタが周期的または不定期に繰り返し現れるため、食事が苦痛になります。さらに再発性アフタの中には全身疾患の一症状のこともあるので注意が必要です。現在、国の難病指定疾患の一つであるベーチェット病は1937年、トルコの皮膚科医ベーチェットが報告したもので、口腔粘膜の再発性アフタの他、目のぶどう膜炎、外陰部の潰瘍を合併するため、関連診療科との協力により、診断・治療が行われます。



トルコの皮膚科医 Behçet

さて、再発性アフタは別として、アフタで代表される口内炎、そのほとんどは2週間以内に治ってしまいます。いったいなぜでしょう。実は口腔粘膜はとても元気が良く、代謝が速いからです。一般に、皮膚であれば1～2か月で、口腔粘膜であれば2週間で、つねに皮膚および粘膜は入れ替わりをしています。皆さんが夏に海や山で日焼けをして真っ黒になっても、秋にはまた元の皮膚の色に戻ることや、口の中を傷つけてもすぐに治ってしまうことがその証拠です。

2週間たっても治らない口内炎。口腔がんに限らず、他の全身疾患が隠れていることがあります。歯科口腔外科や耳鼻いんこう科を受診し、検査を受けることをお勧めします。

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

